

---

# a tempo primo

影山 月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

a tempo primo

### 【Zコード】

Z5646M

### 【作者名】

影山 月

### 【あらすじ】

演劇部の乾と嘉狩は、いつもと変わらぬ日常がこのまま続くと思っていたが・・・

高校時代の大切な時間を過ごした、二人の男の子のお話。

僕達は準備をしなくてはいけない。

いつか、大切なものを失う日がやって来るから。

いつか、小さな幸せがやって来るから。

だから準備をしなくてはいけない。

いつか来る旅立ちの日の為に。

高校一年の夏休み。僕、乾駿は友人の嘉狩大和のマンションに勉強がてら、遊びに来ていた。

「今日、数学の課題を終わらせたら、映画とか行かねえ?」  
嘉狩が誘つて来たが、僕はイマイチ乗り気ではなかつた。

「んー。暑いから外、出たくないけど・・・」

気の無い返事をした僕に、嘉狩は思わず呆れた顔をした。

「あのや、暑いのにウチには来るわけ? じゃ、夜、映画行こいづか。なら、いいだろ?」

僕は嘉狩が用意してくれた麦茶を飲み干すと、持参したスポーツバッグをテーブルの上に置いた。

「僕さ、何本かDVD持つて来たよ。今日は、部屋で見よ?」  
参考書の入つたバッグからDVDを取り出すと「どれがいい?」  
と嘉狩に聞いた。

「なんか、準備良くない? ま、芝居の勉強って事で良しとするか

嘉狩と僕は同じ演劇部であった。

だが、嘉狩とは違つて、僕は芝居の音楽を選曲する裏方であった。演劇なんてまるで興味は無かったのだが、嘉狩の猛烈な後押しもあつて入部することになったのだ。

それはさて置き問題なのは、嘉狩が映画鑑賞の終わつた後のうんちくが酷い事だった。

たいした芝居も出来ないのに、と正直僕は思つ。もちろん内緒だけだ。

そんな訳で、部屋でDVD見ていたほうがお金もかからないし、既に見ている映画なので、嘉狩が語り始めていてもあまり気にならない。

これが映画館だつたりしたら、僕は完全に映画の余韻に浸れないのだ。

嘉狩はテーブルの上に並べられたDVDから一本選ぶとプレイヤーに入れ再生した。

選んだ映画はかなり昔のもので、今の僕達にとつては逆に新鮮であつた。

再生し、しばらくすれば、その映像の世界に嘉狩はすぐに吸い込まれた。

嘉狩は芝居の事となるといつだつて目を輝かせる。

僕はその輝きを失つて欲しくないと思つてゐるけど、きっと諦める日が来るだろう。

だつて人生つてそんなにうまく行かないものだ。何度だつてきつと挫折する。

僕は、幼い頃からピアノを習つていて所為か作曲する事に興味があり、以前、嘉狩にその事を話したら「作曲家になれ」と言われた。嘉狩はなりたいものには必ずなれるつて思つてゐる。

その、純粹さゆえに。

その、未熟さゆえに。

だから、僕は震えそうになる。

嘉狩が変わってしまうのでは無いかと。

今の嘉狩を僕はいつまで・・・感じられるのだろう。

「な、乾は俺が芝居の道に進んだら、付いて来てくれるか?」

嘉狩がテレビの方を向いたまま話し掛けた。

「えつ?」

突然話し掛けられ、言葉に詰まっている僕に嘉狩は言葉を続けた。  
「漠然としてるかもしれないけど、将来、俺はどんな形であつても  
芝居をやりたい。それで、そこにはいつも乾が居て欲しい。だから  
「ちよつと待つて」

映画を見ている最中に話し出すことは珍しい嘉狩の言葉を、僕は  
遮つた。

「嘉狩、なんか勘違いしてない? 僕は今演劇部にいるけど、それ  
は作曲の勉強になるかなって思つたからで、将来演劇関係に進みた  
いなんて思つてないよ」

ちよつとだけヒステリック氣味に言つたものだから嘉狩は驚いた  
顔で僕を見た。

ほらね、嘉狩はいつだって自分の思う通り、願う通りになると思  
つてる。

「そうなの? 僕てつきり楽しくてやつてるのかと思つたから。な  
んでもいいから演劇に携わつてくれたらって思つてたけど・・・そ  
つか

嘉狩はそう言つて再び映像を見だした。僕は少し後悔し嘉狩のベ  
ッドに寝転ぶと天井を見上げた。楽しいに決まってる。でも、それ  
とこれとは別だ。

「ねえ、嘉狩。ずっと一緒に居られるなんて思わない方がいい。そ

んな風に思つてたら傷付くだけだから

「・・・・・」

嘉狩が無言なままを良い事に、僕は言葉を続けた。

「僕、まだ自分の本当にやりたいことなんて、分からんんだ。嘉狩みたいに目標がはつきりしてなくて、今だつて大学ビニにしてしまう悩んでるし」

僕は頭の下に手を置くと、嘉狩に会つた頃を思い出していた。

中学の頃、ピアノコンクールの課題曲に自信の無かつた僕は、昼休みを使って音楽室でピアノの練習をしていた。

何度も指先がひつかかる所があつて、僕はその部分を何度も何度も練習した。

すると突然扉が開き、入つて来た人物に開口一番こう言われた。

「全部、聴かせてくれ！ そこ、ばっかじや無くて！」

『野性的で不良っぽい男』 それが僕の感じた第一印象の嘉狩であつた。

嘉狩は放課後、屋上で昼寝をするのが日課になつていた。

そこへピアノの音が聞こえて来て、最初は心地良かつたもののそのうちに同じ所を何度も弾き直すので、じれつたくなつて乗り込んで来たそうだ。

そんな理由を聞いて僕は思わず笑つてしまつた。

こんな僕の演奏でも聴きたいと思つてくれる人が居たのだと思つて嬉しかつた。

そして嘉狩が来たことによつて僕は、緊張の糸がほぐれた気がした。

「じゃ、そこに座つて聴いてて。ちゃんと全部聴かせてあげるから

「やつた！」

嘉狩は椅子に座ると足を組み、嬉しそうに僕の演奏を待つた。  
柔らかな日の光が差すその場所は、その日から僕達の小さな楽園になつた。

「・・・寝てるし・・・」

乾は、いつの間にかベッドに横になつたまま眠つていた。

「たく」

俺は呆れながらも、クーラーの効いた部屋で風邪でもひいたら大変なので、薄い毛布をかけてやつた。

「俺にあんな事言つて、本当に傷付いても知らねえぞ」「言いたい事だけ言つて、さつさと眠つてしまつた乾の寝顔を見ると、不意に自分の胸が苦しくなるのが分かつた。

不安なんだと思う。

その理由はなんとなく分かる。

でも今はまだこの限られた時間を大切にしたい。

今日は必ず乾に打ち明けようと思っていたのに、こんな簡単に諦めるなんて、やっぱり乾にあんな風に言われたからだろうか。

でも『付いて来る』と言わいたら俺はどうするつもりだった？

愚問だな、本当に。

「乾・・・泣かないでくれよ」

顔を指先でそつと撫でると、乾は眠りから覚めた。

「ん・・・あ、寝てた・・・あふう」

鼻声の乾は気持ち良さそうにベッドの中で体を伸ばした。

「もう、とつぐに夜だぞ」

そう言ひながら乾にげんこつを食らわした。

「痛てつ、起こしてくれればいいのに・・・」

ぐずつた子供のように乾は言つた。

「さ、もう帰つたほうがいいぞ。駅まで送つてやるから」

「あ、うん」

乾は何か忘れている気がしてならなかつたけど、嘉狩に帰り支度を急かされ、その事もすぐに忘れてしまつた。

駅に向かう細い路地で乾と嘉狩は肩を並べて歩いた。

嘉狩は自転車を押しながら歩いている。

乾を駅まで送つた後、それで帰るのだ。

「お前、言つたよな。『ずっと一緒に居られるなんて思わない方がいい』って。正直、あんな風に言われると思って無かつたから、驚いたけど・・・でも、乾がそう言つてくれたから安心した」

「？」

勘の良い乾の事だ。

今日の俺がなんかおかしいと思つていいのだね？

言いたい事があるときは、はつきり言つタイプなのにて。

俺はここ数日、いつ言おうか迷つていた事を打ち明けると決めた。

「俺、オヤジの仕事の都合でシンガポールに行くことになつた

「えっ！」

乾の顔が不安そうに歪んだ。

「俺達、一緒に居た時間つて短かつたけど、俺はお前の」と『親友』つて思つてたからさ。だから、言つてびらかつた。でも、乾なら大丈夫だよな？」

視線を合わすのが痛かつたが、思い切つて乾を見る。

その一瞬の表情で乾が怒つていてると分かつた。

「いつから？」

「夏休み終わつたら」

「なんだよ。一緒に演劇コンクール出るんじやなかつたのか？」

田を逸らして震える声で、俺に抗議している。

「・・・乾

僕達は氣付くことに臆病だ。

何故なら、それを知つてしまつ事によつて裝う事しか出来なくなるからだ。

「違う、そうじやない。そんな事を言いたいんじや・・・無い」

乾は自問自答しながらも、理性を保とうと必死だった。

「こういう時、ドラマみたいに土砂降りの雨が降つて僕の醜い心を洗い流して欲しいけど、そう上手く行かないよつだ。」

今は、ただ嘉狩の目を見るだけで精一杯の僕を、どうか笑わないで欲しい。

今さつきまで在った日常を僕は失つたから。

鈴虫の鳴声と心地の良い風が、僕達に夏の終わりが近付いている事を教えてくれた。

体育館を貸しきつての練習は、今日から本番前日まで特別に許されていた。

皆、いよいよ本番が近付いて来ている事を感じ、テンションも上がりついた。

多分、僕を除いて。

嘉狩とはあれから、距離を取つてしまつていて。

それに部活にも顔を出して居なかつた。

「おーい。乾、機材運ぶの一年に指示して」

部長の苑田がだらだらと仕事をしている僕に声を掛けて來た。

嘉狩は苑田部長に憧れてこの学校に入つた。

僕は演劇の事はあまり分からないけど、それでも苑田部長が誰よりも芝居が上手いことは分かるし、それに何よりこの人からは独特のオーラのようなものがあつて、それを皆、真似しようとしているけど到底真似出来ない絶対的な魅力があつた。

「乾、嘉狩がシンガポール行くの聞いた？」

一年生に一通り指示が終わつた僕に苑田部長が再び声を掛けて來た。

「あ、はい・・・聞きました」

機材から出る長いコードを綺麗に束にしながら、僕は答えた。

「で、引き止めたの？」

「えつ」

部長から出てきた言葉に僕は耳を疑つた。「引き止める」 そんな事を言われると思わなかつたからだ。

いや、違う。

「引き止める」なんて僕は一度も思い付かなかつたからだ。

しかし、改めて思えばおかしな話だ。

「引き止める」など僕に出来る事ではない。

僕がひきとめて、それで嘉狩がここに残るなんて有り得ないのだ。むしろそうやって、未練がましくするのは、いけない気がする。

「いや、でも引き止めるなんて、僕には出来ませんよ。お父さんの仕事の都合じや」

僕は手作業を続けながら答えた。

「なんだ、案外さっぱりしてるんだ。乾はワンワン泣いて『行かないでえ』とか言つて鼻垂らしてるタイプかと思つてた」

「・・・・・」

自分の事を勝手にイメージされ少しカチンと来たが、心の奥底の気持ちを当たつていい。

「あいつ、昨日の夜になつて電話でいきなりそんな事言つかりさ。急に決まつた事なのかつて聞いたら、結構前に決まつてたけど言いづらかつたつて。お前の柄じやないつて言つてやつたよ」

苑田部長は笑いながら、それでも絶対に僕の動向を見逃さないのが分かる。

きつと僕を試しているのだろう。

僕はいつから、何でも受け入れてしまつようになつたのだろう。どうして自分から、変えようと出来ないのだろう。

気付いて、諦めて、押し殺すだけの僕の性分は、何度も傷付いたら治せる？

僕の起こした行動によつて何が変わるかは分からぬけど、それ

でも嘉狩にこの気持ちを伝えるのはきっと間違いじゃない。後悔は慣れてるけど、どうにしちゃない。後悔するならば···

「部長。ちょっと大事なこと思い出したので帰ります」

僕は、やり掛けの作業と苑田部長を残して体育館を後にした。その、何かを決意した乾の姿を見て苑田は指先でフレームを作ると、その中に乾を囲つた。

「新しい自分を見つけた奴の後ろ姿、か」

苑田は一瞬だけ口許を緩めると、すぐに厳しい表情になり部員を集めめた。

苑田の号令にみんな駆け足で集まる。

「えー、今日から本番までは各自、体調管理はもちろんのこと、この一瞬一瞬を大切にそれぞれの目標に向かつて努力して下さい」

『はい!』

部員全員が体育館を揺らぐほど声で返事をした。

僕の急な呼び出しに、嘉狩は理由も聞かずに来てくれた。

呼び出した場所は母親がやつているピアノ教室で、庭の離れにあるプレハブ小屋だった。

嘉狩とはこの間会つたばかりだと書つのに、長い期間会つて居ないような感覚に陥つた。

「どうした?」

嘉狩は心配そうに僕を覗いた。僕は慌てて視線を逸らす。

僕の行動に理解出来ないまま嘉狩は戸惑つた様子で僕を見ている。

「嘉狩は、どうしてそんな風に居られるんだ? 僕はこんなに苦しいのに」

僕は嘉狩から顔を逸らしたまま、溢れ出る感情を押し殺しながら言った。

嘉狩がそんな僕の姿を見て嬉しそうに口角を上げたのを、余裕の

無い僕は気付きもしなかった。

「なにが？」

嘉狩は若干の挑発的な微笑とも思える涼やかな顔で言つて來た。

「嘉狩……」

その言葉を聞いて怯んだが、その僕よりも優位な立場であるつ嘉狩の態度が、再び僕の中で炎になつた。

でも、また言葉を發すれば嘉狩に打ち消されてしまいそうで、自分でも何を言つたらいいのか分からなくなつていた。

すると、嘉狩から深いため息が聞こえた。

「なんだ、そんな事言いに來たのか？ 僕はもつと衝撃的な展開を望んでいたんだけどな」

嘉狩はふいと横を向いてしまつた。

たしかに「そんな事」なのかも知れない。

『な、乾は俺が芝居の道に進んだら、付いて來てくれるか？』

あの言葉を受けた日、なんて悲しい答えを言つてしまつたのだろう。

僕は気が付くと、その事を後悔していた。

だつて嘉狩はあの日、想いを打ち明けてくれたのに僕は、それをちゃんと受け止めなかつた。

今更、何を言つても嘉狩には通じないのかも知れない。  
でも、僕もちゃんと伝えなくちゃいけない。

そう思つてここに居るのだから。

「僕は嘉狩と離れる事も、それが僕にとつてどれだけ重要かつて事も、今更遅いかも知れないけど分かつたんだ。もう十分に。でも、考えれば考えるほど混乱するんだ。これくらいの事でたじろいでどうするつて。これから先、また何かを失う事があつたら、また同じ事をするのかつて。僕の中の僕が問い合わせて来るから」

「いい加減にしろ！ 乾は何しに來た？ 何の為に俺をここへ呼び出した？」 答えは簡単な事だ

声を荒げた嘉狩は僕の肩を掴むと揺さぶつた。

僕は嘉狩の強い瞳に吸い込まれそうになる。

「嘉狩・・・嘉狩は僕と離れて平気なの？ 僕は」

「だつて、乾は平気なんだろ？ それなら俺だつて平気つて言うし

僕の言葉を遮つて嘉狩が話し始めた。

「かないだろ。なんかカツ「悪いし」

「嘉狩・・・もしかして嘉狩も」

「だあーっ！ それ以上言うなよ。なんか恥ずかしいだろ。それに顔が赤くなつている嘉狩を見て僕は安心した。

「それに？」

「乾の言葉をまだちゃんと聞いて無い」

「・・・・・・分かつた」

嘉狩は乾を見つめながら思つていた。

俺はお前がいつか離れてしまつなんて考えた事無かつた。

でもお前は考えていた。

それを知つた時、正直ショックだつた。

だつてお前は失う事に慣れ過ぎていたから。

そして俺の事もその対象になつていると知つたから。

俺は失わぬよう生きて来たけど乾は失つても大丈夫なように生きている。

それが俺達の絶対に交わらない領域であつたのだ。

似てないから惹かれあう そうなのかも知れない。

本当は一番嫌いなタイプなのかも知れない。

でも、乾の柔らかな物腰とピアノを弾く纖細な指、時たま見せる  
とびきりの笑顔。

全て失いたくなつた。

若い俺達にとつて父親の転勤は搖るがせない現実だ、でも乾が俺  
と同じ気持ちでいてくれたら、どんなに幸せだらう。

俺は毎日願つてた。

お前の眩しい笑顔を見るたびに。

お前の迷いを見るたびに。

「傍に、居て欲しい。どこにも行かないで欲しい。」

乾の言葉に嘉狩は大きく頷くとその大きな手で乾の頭を優しく撫でた。

「よく言つた。誓めてやる」

夏休みが終わり、三学期始まった。

僕の隣には嘉狩は居ない。

嘉狩は笑顔でシンガポール行きの空港に向かった。

寂しい でもそれは決して口に出してはならない言葉に感じた。教室は既に嘉狩なんて最初から居なかつたかの様に日常を送つている。

それでも救いなのは、僕には演劇部が残つたという事だった。演劇部に居ると不思議と嘉狩がその辺りに居るような気持ちになることだった。

僕は否定したものに救われている。

最終の音源チェックを終え、久しぶりに音楽室に立ち寄つた。ピアノを弾いてみる。

曲は嘉狩と出会つたきつかけとなつたものだ。

僕はふと自分の目から涙がこぼれているのを知つた。

「嘉狩・・・会いたい」

自然とこぼれた、その言葉に自分でも驚く。

「早く曲の続きを聴きたいんですけど」

扉から聞こえてきたその声には聞き覚えがあつた。

「こつちに居るばあちゃんトコから学校通いたいって親を説得するのに、すげー時間かかつたんだぞ」

「嘉狩！」

僕は扉にもたれ掛かっている嘉狩に駆け寄るとその胸に飛び込んだ。嘉狩は一瞬驚いたがすぐに乾を優しく抱きしめた。

「ちやんと、メシ食つてるか？　痩せた気がするナビ」

「じゃ、一緒に食べててくれる？」

嘉狩の腕の中で僕は甘えた。

「いいけど、その前に、さつきの続きを弾いてくれないか？」

僕をそつと体から離すと嘉狩は指先を触ってきたので、なんだか恥ずかしくて僕は手を引っ込めてしまった。クスリと嘉狩は笑った。

「わ、分かった。じゃ、そこに座つて」

嘉狩はなんでも願い通りになると黙つている訳じゃない。

嘉狩はそうなるように、運命を変えてしまえる様な人間なんだと思う。

だから憧れてしまつ。

あの頃より数段上手くなつた僕のピアノは、僕達の成長を表しているかの様だつた。

そして、僕達はいつも速度で生きていく。

ねわり

(後書き)

これは、とあるとあるところに応募した作品ですが、読み返してみると不思議な感じがします。

これ・・・ボーアズラブ？

今の私なら、ちょっと書けないお話です。  
ボーアズラブが駄目な訳ではないですが。むしろOKなんんですけど  
ね・・・（笑）。

読んで頂きありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5646m/>

---

a tempo primo

2010年10月8日14時19分発行